

友だちとかかわりながら、主体的に学び合う宇賀っ子の育成
～思いや考えを広げ・深める対話的な授業の創造～

下関市立宇賀小学校
教諭 佐藤 光洋

1 はじめに

本校では、複式・小規模校としての良さを生かし、そのために生じる課題にも対応しながら、日々の授業改善を図り、研究を進めてきた。また、本校児童の向上させたい力として、「宇賀型課題対応能力」を定め、「①学び合う力（話す力・聞く力・反応する力）・②学習リーダー力・③自分ごととして振り返り、学びに向かう力・④思考力、読解力、書く力・⑤自己効力感」が身に付くよう、校内での実践と併せて、他校・家庭・地域とのつながりや広がりも大切にしている。

研究の進め方としては、主体的・対話的な授業を仕組むことで、児童が、思いや考えを広げて深める学びを進め、その結果、「友だちとかかわりながら、主体的に学び合う宇賀っ子」を育成できるのではと考え、一人一授業の研究授業を基盤に、対話を生み出すための場づくりや、ICT 機器の効果的な活用にも取り組んでいくこととした。2学期までに実践した研究授業について紹介することで、本校の実践の報告としたい。

2 研究授業

【1・2年生複式学級 算数科 1年「たしざん（2）」 2年「かけ算（1）」】

① 成果

本時では、「児童の主体的な学び合い」の姿が見られた。学習リーダーは、リーダーカードを見ながら、進んで授業を進めていた。1年生3名と2年生4名の全員が、意欲をもって学習に取り組む姿が、最後まで見られた。学習問題に取り組む時、1年生では教師が「 $4 + 8 = 14$ 」の誤答を示し、全員で検討させた。2年生では、「 3×5 」と「 5×3 」のどちらが正しいのか、全員で比較・検討させた。この進め方で、どちらの学年でも学び合いが生まれ、教師が入らなくても、児童が学習のめあてに向かって主体的に課題解決する姿が見られた。



どちらの学年でも、自分の考えを説明する活動が設定されていた。1年生では、教師が説明のお手本になるひな型を準備しており、児童がひな型を参考にしながら、たし算における「加数分解」について説明することができた。2年生では、1学期から取り組んできた「まず、次に、だから」などの説明言葉を使って、自分の力で説明を進めることができた。また、友達の説明に対して、「分かりました。」「いいと思います。」などの反応をして、聴き手として自分の考えを話し手に伝えることもできていた。1・2年生共に、お互いの説明を聞き合いながら、自らの学びを深めることができたと思われる。

② 課題

「学び合い」をより深めるために、児童一人ひとりの基礎学力の定着は必要である。特に、算数科の文章問題で、内容を正しく把握することは欠かせない。本時では、2年生において、その点が不十分であった。問題の文章を読み、図や「□の○つ分」というキーワードをノートに書いていたが、それだけでは、問題内容の把握が不十分だった児童が複数いた。低学年のうちから、問題文をノートに書き写すことや読み取ったことを絵や図に表すこと、必要な数字に印や線を書き入れるなどの活動を、日常的に行うことが必要であった。



ICT機器の活用についても課題が見られた。本時では、電子黒板に教科書を写すことで、問題内容の共有や必要なことを直接書き込むことを行ったが、十分だったとは言えない。今後、教科や単元の内容に応じたICT機器の具体的な活用の仕方を研究する必要がある。

授業の「振り返り」は、1～5の数字で表した「分かったレベル」と、「本時で分かったこと・次時のめあて」を書かせていた。今後は、書いた「振り返り」を全員で共有することと、「まとめ」と「振り返り」を関連付けていくことで、より「振り返り」の充実を図る必要がある。

③ 今後の取組

本時では、児童の意欲的な学習態度と、主体的なリーダー学習の姿が見られた。また、「学び合い」についても、日常の積み重ねが本時の姿に反映されていた。授業後の協議会では、「誤答」を活用することのよさや、児童の説明を元にした「学び合い」に取り組んでいくことを、全教員で共通理解できた。それぞれの学級の実態や教科・単元の内容に応じて、「学び合い」を生み出す様々な実践を研究していきたいものである。

また、更に学び合いを深めていくためには、「②課題」で述べた「ICT機器の効果的な活用」と「振り返りの充実」も必要である。「ICT機器の効果的な活用」については、児童一人ひとりが学習内容を確実に理解すること、より意欲的な「学び合い」や個別最適な学びによってさらに理解を深めることにつなげる必要がある。「振り返りの充実」については、本時の課題でもある「まとめ」と「振り返り」をいかに関連付けていくかを考えていかなければならない。その上で、児童がお互いの「振り返り」を共有し、児童の言葉を生かして本児のまとめをしたり、次の学習につなげたりすることが大切である。また、学習内容をしっかりと定着させると同時に、充実した「振り返り」の時間を、45分間の中にどのように納めていくか、という時間配分も考えていく必要がある。

【自閉症・情緒障害特別支援学級 算数科 6年「図形の拡大と縮小」】

① 成果

本時では、「個に応じた支援や指導」がよく工夫されており、児童の学びの充実につながっていた。マグネットを付けた「長さや角度を表す数値」のカードや3つの合同な図形の描き方を色分けしたカードは、児童が思考を停滞させず、必要なことをスムーズに理解し

ながら学習を進めることにつながっていた。自分が考えた「拡大
明する際の支援として、予め、説明のひな型をロイロノートに
準備し、必要に応じて児童が確認しながら説明の文章を作ること
ができていた。



「友だちとのかかわりや主体的な学び合い」を生み出すための
手立てとして、自分の説明によって、友達に拡大図を書かせる
やり方はとても効果的だった。児童相互のやり取りが活発になり、説明する児童も聞きな
がら描く児童も、学び合いを通して、自らの学びを深めることができていた。また、3つの
描き方のうち、児童から出なかった描き方については、縮図を描く時に、教師が意図的に
その描き方で児童に書かせたので、授業の中で3つの描き方を全て取り組むことができた。

タブレットや電子黒板などの ICT 機器が、個別の支援や学び合いのために効果的に活用
されていた。児童が、タブレットの扱いによく慣れており、進んで説明を打ち込んだり、図
形を確認したりすることができていた。

② 課題

「①成果」で示したように、拡大図の描き方を説明する時には、
学び合いが生まれ、児童が自分の学びを深めることができていた
が、始めの学習問題の内容の把握と拡大図の描き方の確認の
ところで、教師からの説明がかなり長くなり、児童と教師や児童相互
のやり取りはほとんど見られなかった。児童は、既習内容につい
ては学力の定着も見られていたので、もう少し説明を短くし、
児童に発言させながら対話を通して進めることが必要だったと思われる。また、拡大図の
描き方の説明以外の場面でも、児童相互のやり取りや話し合いを生み出す工夫が必要であ
った。例えば、縮図は児童が協力して話し合いながら作成するようにすれば、自然と学び
合いが生まれ、時間の短縮にもつながったと思われる。



また、始めの学習内容の確認の影響で、授業のまとめと振り返りが時間内に収まらな
かったことも課題として挙げられる。

③ 今後の取組

「①成果」で示したように、「個に応じた支援や指導」については、様々な効果的な実践
が見られた。これらの実践は、特別支援学級の授業としてだけでなく、通常学級の授業で
も生かせるものである。各担任が今後の実践の参考にしていきたい。特に、児童の実態に
応じて、思考の流れを支援できる教具などは準備に時間がかかることもあるので、効果的
だった教具などを教師がお互いに紹介し合って、全校で共有できるようにしていきたいも
のである。また、ロイロノートの「思考ツール」をより効果的に使えるように研究を進める
ことも必要と思われる。「思考ツール」の研究を進めることは、児童相互の考えを可視化し、
「学び合い」を生み出すことにもつながる。

「学び合い」を生み出すための実践としては、今後も発問や学習課題の工夫、話し合い

や学び合いの人数に応じた形態の工夫にも取り組んでいきたい。前述の1・2年生複式学級で実践した、教師からの誤答を基盤にした授業の進め方や本時の特別支援学級で実践した、児童の説明を聞きながら他の児童が活動を進めるやり方は、具体的な実践として今後も学級の実態に合わせて取り入れていきたい。

3 おわりに

2学期までに実践した2学級の研究授業について紹介した。本校では、研究授業後の協議会で話し合ったことを元に、その後、全校で取り組んでいくことを確認している。今後の本校の課題として、「学び合いをより深めるためのしかけや工夫の充実」、「めあて・まとめ・振り返りをいかに関連づけるか」、「学習理解と学び合い・個別最適化につながる効果的なICT機器の活用の仕方」の3つが、現時点で挙げられる。今後、教師一人ひとりがこれらの課題に向き合い、お互いの情報交換も行いながら、それぞれの課題を成果として捉えていけるように、日々の授業実践に取り組んでいきたい。